

# 早稲田大學東洋哲學會 第三十六回大會

〔日時〕 令和元年六月十五日（土曜日）午後一時より

〔会場〕 早稲田大學文學學術院 三十三號館三階 第一會議室

## 〈研究発表および講演要旨〉

### 【研究発表】

王弼の「道」と萬物に關する理論について

伊藤 涼

王弼（二一六～二四九年）は、正始年間の論壇で活躍し、何晏とともに「玄學」思潮の旗手とされる。その思想の骨格には、「無形・無名なる者」である「道」が「萬物の宗」として萬物を支えている、という抽象的な世界像があるが、従来の研究では、この抽象的な世界像がいかなる理論によって根據づけられているのかについては十分に明らかになっていない。本発表では、王弼思想における萬物の理解を検討し、その上で「道」から萬物への關與の仕方に関する理解を確認することで、「道」を頂點とする世界像を支える具體的な理論を明らかにする。

### 『守護國界章』における『法華論』釋義とその系譜

武本宗一郎

平安初期にかけて最澄と徳一の間で交わされた教理論争では、『法華經』の釋義が重要な論點であった。特に、『法華經』と『法華論』との關係性についての議論には、兩學匠の思想と思想的背景が色濃く表れている。本発表では、『守護國界章』卷中之下「飢食者示す所の方便品の科段を駁する章第十九」の、『法華經』の經文を『法華論』の甚深という教説によつて解釋した箇所を取り上げること、兩學匠の思想的背景の一端を明らかにし、法相・天台の『法華論』釋義の系譜のなかに位置づける。

### 『南方錄』における「草庵」―わび茶人と四疊半座敷の變遷をめぐって―

櫻本 香織

『南方錄』は江戸中期に立花實山が著し、その後最も重要な茶の湯の理論書とされた。そこで茶室は、「草庵」や「小座敷」と示され、わび茶の精神を表すとされる。また、珠光・紹鷗は四疊半座敷を、利休は二疊の草茨の小座敷を用いたとある。しかし、先行研究は、珠光・紹鷗の四疊半座敷の内容と三人の師弟關係を史實ではないと指摘している。本発表では、實山が引用する『史記』などに見られる堯・舜らの聖人が草屋に住んだという記述に注目し、わび茶人と草庵の關係を實山が参照したと考えられる『正法眼藏』にまで及んで検討したい。

### インド佛敎論理學派における知の有形象性の論證

#### ―『プラマーナ・サムツチャヤ』第一章第十一偈の解釋―

三代 舞

インド佛敎論理學派によれば、我々は外界の對象ではなく、何らかの契機によつてもたらされた、知の内部にある對象の形象を認識している。このようないわゆる有形象認識論を主張する中で、デイグナーガ（四八〇～五四〇頃）は『プラマーナ・サムツチャヤ』（*Pramāṇasamuccaya*）第一章第十一偈において、知が對象の形象を有することの論證を提示した。本発表では、その論證がダルマキールティ（六〇〇～六六〇頃）やプラジニヤーカーラグプタ（七五〇～八一〇頃）等の後繼者によつてどのように解釋され、繼承されたのかを明らかにする。

### 「天神七代」をめぐる言説史・再勘 ― 神話注釋の視座から ―

原 克昭

中世神道説研究の一環として「天神七代」をめぐる言説の再檢證をはかる。初代・國常立尊より第七代・諾冉二神にいたる「天神七代」説を主題として措定し、神話注釋および宗教文藝の諸説を讀み解くことによつて、中世特有の「アナロジ―思考（想起・喚起・連環）」の解明を試みる。その過程において、神代紀に込められた神話注釋の叡知、ならびに〈近世神話〉論との斷續性を探究することで、〈中世神話〉論の相對化をめざしてゆく。

### 【講 演】

#### 確立期修驗道の思想と儀禮 ― 即傳『修驗要祕決集』を中心に

宮家 準

修驗道の思想・儀禮は、十六世紀初期日光出身で金峰山・彦山などに傳わる切紙をまとめた即傳の『修驗要祕決集』などによつて確立した。本講演では、この彼の主著に見られる思想と儀禮を紹介する。具體的には思想に關しては宗旨・依經・山嶽觀・本尊觀・衣體・字義・成佛論など、儀禮については峰入に焦點をおいて、十界修行、峰中での床堅・闍伽・小木・灌頂などをとりあげる。